
ひきこもりユーヘー ~ひきこもり対いぬ~

USAVICH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひきこもりリューヘー　　ゝひきこもり対いぬゝ

【Nコード】

N20250

【作者名】

USAVICH

【あらすじ】

3年以上自室に引きこもっていたリューヘーだったが家族の不在をきっかけに一階に下りていくこととなる。しかしそこにいたのは自分と同じ名前の犬。リューヘーの名前を賭け、血生臭い戦いが今始まる！！ひきこもりリューヘーシリーズ第2段！！

ファーストコンタクト（前書き）

自室から出るという冒険に出るリユーへー。
彼を待ち受けるものとは？？

ファーストコンタクト

リユーヘーはかれこれ3年以上の間一度も自室から出ることはなかった。

家族が旅行に誘うもそれを当り前の如く拒否。

完全にニートでオタクで引きこもりのリユーヘーにとって家族の気づかいは逆にリユーヘーを苦しめるだけだった。

しかし家族が旅行に出て行くという事は家にはリユーヘー一人ということになる。

食事でも自らで用意しなくてはならないという事だ。

という事は部屋から出て一階に降りる必要がある。

リユーヘーにとってはそれだけで十分旅行だった。

家族が出ていってからどれくらいが過ぎただろうか。

リユーヘーは下に降りてみることを決心して重い腰を上げた。

あまりに久しぶりに見る自室以外の部屋に戸惑いを隠せなかった。

正直自分の家がどういう構造だったのかもつる覚えだった。

四苦八苦しつつも階段を下りて行くとそこには……

そう、そこには犬がいた。いつの間にか飼っていたらしい。

リユーヘーには犬種までは分からなかったが真っ白で可愛い容姿だった。

ふいにリユーヘーは自分がその飼い犬より立場が低いという固定観念に囚われてしまった。

その犬を撫でることすらおこがましい。そんな感じだった。

一方犬は始めて見る相手を吠えて威嚇する事もせずただジッと蔑むような目でみていた。

リユーヘーはその視線に思わず目を反らした。

するとふとテーブルの上に手紙が置いてあるのを見つけた。

その驚愕の内容にリユーヘーは天を仰ぎ、神を罵った。

ファーストコンタクト（後書き）

犬の具体的な容姿はsoftbankのお父さん（北海道犬）のちっちゃいバージョンみたいなのをイメージしていますw

圧倒的優劣（前書き）

家族からの置手紙には驚愕の内容が記されていた。
リユーヘーとリユーヘーの戦いの火蓋が今切って落とされる。

圧倒的優劣

- - リューヘーヘ - - - - -
- - - - -

その犬の名前はリューヘーと言います。

旅行から帰ってくるまでにどちらが本物のリューヘーか
決着をつけてください。負けた方は追い出します。
うちにリューヘーは二人もいません。

追伸

リューヘーのごはんはドックフードです

家族一同より

- - - - -
- - - - -

リューヘーは犬をにらみつけた。

この犬は文字どおりリューヘーになり替わろうとしてるのだ。

生き残る為にはこの犬に勝たなければいけない。

生き残るのはどちらか一方。喰うか喰われるか。

犬の凜とした容姿はリアルに充実している感たっぷりだった。

しかしここで引けをとっては勝ち目がない。一言いっておく必要が

ある。

「お、おい犬！ひ、一言いつとくけどなあ僕は君に地位を譲るつもりも、この家から出て行くつもりもないからな！」

犬のリューヘーは澄まし顔で言い返してきた。

「リューヘーさん、それは私のセリフですよ。ひきこもりのあなたに負けるつもりはありませんよ。それからわたしの名前は犬じゃありません、リューヘーです。以後、おもしろおきを。」

犬のくせに随分な口ぶりだった。犬に負けるなど引きこもりの恥だ。ちがう、ひきこもりじゃない、人間の恥だ。

その時ピンポンと音がした。

リューヘーはびくつとなった。インターホンの画面に知らない人の姿が映し出されている。

今のリューヘーに人とコミュニケーションをとることなど不可能極まりない。それを読み取ったリューヘー（犬）がにやにやしながら皮肉たつぷりに言った。

「あれ、リューヘーさんお客さんみたいですよ？でないんですか？しょうがないなあ私が行きますよ、これも番犬としての役目ですからね。」

リユーヘー（犬）は玄関に走っていき、器用にドアを開けた。
りゅーへー（ひきこもり）はあわてて隠れ、様子をうかがう。

「あら、リユーヘー君、よしよし、お母さんは？」

「こんにちはおとなりのおばさん。家族は今旅行にいつてます。」

「旅行？そう、それでリユーヘー君はお留守番？」

「役目ですから。」キリッ

「偉いわねー、なにかあったら遠慮なく言ってね。」

「お心使い感謝します！」

そうしてお隣の人は去って行った。

そして残ったのは誇らしげにこちらをあざ笑う顔をした犬。

そして本物のはずだが自信がなくなってきた人間。

この犬はリユーヘーが出来ない事をなんなくやってのける。

今のリユーヘーにはこの犬に勝る要素を何一つとしてもちあわせてはいなかった……。

圧倒的優劣（後書き）

ちよつとがんばって長い文での投稿です

ドッグフード（前書き）

犬の人間味は加速し、引きこもりは絶望に打ちひしがれた。
リユ－ヘーのごはんとはいったい？

ドッグフード

現実とも思えない現実に打ちひしがれたリユーヘーは自室にひきこもった。

リユーヘーだけの世界。リユーヘーにとって自室だけが現実であつてそれ以外で起こつた出来事はすべて見てはいけない悪夢だ。あの犬もしかり……。

ネットダイブをし始めて何時間かたつたころだつた。

その時窓から自分と同じ名前で尚且つ自分よりすぐれている犬の姿が見えた。

しかも一人ではない。リユーヘーをかこむようにたくさんの女の子
ー人間の女の子が
ネットやゲームでしかみた事がなかった存在がああ、クソ犬と歩いている。

そしてこちらに、こちらの家に歩いてきている……。

一体何が起こっているのだろうか、そしておそらくは5、6人はいるその集団は
我が屋になだれ込んだ。

「ど、ど、ど、どうしよう、こわいよ」

とリユーヘーは等身大の人形に抱きつくが何も答えてくれない。そ

うこうしているうちに

そのハーレム集団は二階に上がってきた。なぜ!?

そう思ったのもつかの間、その集団は隣の部屋に入って行ったらしい。

どうやらあのクソ犬には自分の部屋まで与えられているらしい。

隣の部屋からしきりにワイワイキャッキャッと楽しそうなどんちゃん騒ぎが聞こえてくる。

リユーヘーは壁に耳を当て様子をつかがった。

「リユーヘーちゃんの毛並みふさふさで気持ちいい!」

「私にもさわらせてよ」

リユーヘーという単語につい反応してしまったリユーヘーはあの犬に対してとてつもない敗北感と同時に自分への嫌悪感にみまわれた。

かといって

「随分楽しそうだね、おいちもませてくれよ」

なんて気さくに隣の部屋にはいつていく勇気持ち合わせているはずもなく

結局ハーレム集団が帰るまで恋愛シュミレーションゲームに興じることしかできなかった。

全員クリアしてハーレムルートになったところでゲームを終えると既に外は暗くなっていた。

そんな事も気がつかないほど現実逃避ゲームをしていたらしい。

いつもならば食事が運ばれてくるが、家族がいなくて今となつては自分で調達しなければいけない。

部屋に取り付けられている10個のカギを開け、やはりいまだに怖い地獄への階段とでも名付けたい13階段を下りるとなぜかいいにおいがした。

そしてリユーヘーが見たのは例のあの犬がフランス料理のフルコース然とした豪華なディナーに舌鼓を打っているところだった。

ちなみに床にはドックフードの入った皿。

「おい犬、なんでそんなもの食べてるんだ。お前のえさはこっちだろ」

犬はナイフとフォークを使い子羊のステーキを切っていた手を止め、ハンカチで口元を拭いてから答えた。

「リユーヘーさん、僕は生れてこのかたドックフードなんて一度も食べたことはありません。

いつも家族と同じものをたべていますからね。それなのに家族はドックフードを置いて行った。

この意味がわかりますよね？」

そう、家族の置手紙の（リユーヘーのごはんはドックフードです）
というのはこの犬に宛てたものではなかったのだ。

文字どおり「負け犬」の象徴としてそれはそこに置いてあった。

リユーヘーは生れてはじめての敵に戸惑いを隠せない。

その理不尽さに泣きながら部屋に隠してあった非常食のスニッカーズをかじった。

ドッグフード（後書き）

失踪回避しました。

投稿遅れてすいません（人ω>、;）

いかんせん暇がないのでw

でもこの話実はかなり先まで書いているので
一定のペースで挙げていこうと思います。

帰還（前書き）

この勝負を仕組んだ張本人である親が帰ってきた。
ついに真相が明らかとなる！？

帰還

リユーヘーの家族が突如帰ってきた。

3日間と言っていたのに何があつたのだろう。

下の階で楽しそうな声が聞こえる。

「リユーヘーただいま！いい子にしてた？よしよし」

無論リユーヘーとは犬の方の事だろうがなぜこんなに早くかえってきたのだろうか。

なににせよよく考えてみるとどちらかを追い出すなんてただのいたずらか何かだったのだろう。

そんなことがまかり通つては狂気の沙汰だ。

そう思いまたリユーヘーは引きこもりを始める事にした。

その時ノックもなしに部屋のドアが開かれた。そこには親が立っていた。

「この勝負キサマの負けだ。トットトデイクソツタレ！」

そうしてリユーヘーは文無しで家を追い出された。

兄弟たちはまるで汚物を見るかのような目でリユーヘーを見送り、犬は笑顔で手を振っていた。

リユーヘーは外の世界に恐怖しながらマッチ売りになった。
という夢を見た。

帰還（後書き）

まだ続きます。夢才チ入れたかっただけです。

終幕…そして…（前書き）

自分では犬に勝てないと悟ったリユーへーはある手段を講じる。
その手段とは？

終幕…そして…

嫌な夢をみた。あの犬をどうにかしないと近い未来正夢になるだろう。

リユーヘーは部屋の隅で体育座りをして犬の恐怖に震えていた。

「どうしよう どうしよう どうし……×100」

あの犬はリユーヘーより全ての面において優れている事は明らかだ。

リユーヘーが勝る要素などどこにもない。

3日後に犬を追い出せる確率など50階のビルの屋上から針を落として地面に置いたコップの中に入れるより難しいだろう。

そんなことを考えているうちにあることに気がついた。そしてひらめいた。

そもそも相手が人間ではないという事実。

「そうだ、家族が帰ってく来る前にあの犬を保健所につきだそう
家族には散歩中に逃げられてしまったとかなん
とかいってごまかせばいいや。フヒヒ」

今のリユーヘーに手段を選んでいる余裕はなかった。

そしてすぐに行動に移す必要があった。しかしリユーヘーは思い悩んだ。

「ほ、保健所……電話しないとだめなのか……電話なんてした事ないよ！」

生れてこのかた家族以外の人間と話した経験などほとんどないリユーヘーに、
一度も会ったことのない人間とまともに会話することなどリユーヘーにとって

苦痛以外のなにものでもない。

しかし、やらなければやられる。

リユーヘーは覚悟を決め電話を手にとった。

電話帳で番号を調べ、一時間かけてようやく電話をかけることに成功した。

ブルルル、ガチャ。

「ハイ、コチラホケンジョデス」

「は、はひ、もひもひ、あの……」

電話先の相手がまるで外国語をしゃべっているかのよう
でリユーヘーは怖くてしょうがなかった。

「ぼ、ぼ、僕の家で飼っている犬が狂犬病になっちゃって……ひ、ひきこもり……じゃなくてひきとってほしいんです。」

「ナルホド、キョウケンビョウデスカ、ワカリマシタ、アシタソチ

ラニホゴシニイキマス。」

それから住所や犬について2、3言やり取りし、電話は終了したのだった。

「これで明日にはやつも終わりだ。僕は自分の手でこの樂園を死守したんだあ!!」

電話での極度の緊張と疲れでリユーヘーはそのまま床についた。

3日目、最終日。つまり家族が帰ってくる日でありそしてあの憎たらしい狂犬が保健所に連れて行かれる日だ。

保健所が来るのはお昼すぎだ。

家族が旅行から帰ってくるのは夕方頃だろう。

つまり僕が勝者となっている時であり、あの犬はもういない。

リユーヘーは勝利を確信していた。

あとはここで引きこもっていればいいだけだ。

昼過ぎになりとうとうその時がやってきた。

玄関のチャイムが鳴った。窓から外を見ると白いワゴン車が止まっていた。

何も知らないあのバカ犬は素直にドアを開けたのだろう。

大きなカゴに入れられた犬の姿が見えた。

ふと、カゴの中の犬が僕の方を見た気がした。

気のせいだろうがその時犬は不適な笑みを浮かべていたようだった。

全てが収束し、家にはリユーヘー一人になった。

もう邪魔するやつは誰もいない。

楽園は守られた。パソコンも嫁も、フィギュアポスターも、小説も… e t c .

その後いつものように部屋の隅で体育座りをしながらフィギュアを愛でていた。

その時外でサイレンの音が聞こえた。この辺りで事件でもあったのだろうか。

サイレンの音はだんだん大きくなっていった。もうすぐそこまできている様だ。

リユーヘーは窓から外を見た。そして驚愕した。

何台ものパトカーが家の前を包囲していた。ヘリも飛んでいた。

あまりの状況にリユーヘーはパニックを起こし現実逃避のためベッドにもぐりこんだ。

玄関のチャイムが鳴らされ、ドアが叩かれた。

そして外から拡声器の音が聞こえた。

「リユーヘーに告ぐ！ひきこもりの容疑で逮捕する！今すぐそこから出てきなさい！

君は完全に包囲されている。出てこなければこちらから突入する。繰り返す、今すぐそこからでてきなさい！」

「引きこもりの容疑？一体何の事？引きこもることが犯罪だなんておかしいじゃないか！

ぼくはただ静かにくraisたいだけなのに！！」

リユーヘーは大量のフィギュアを抱え込んでベッドの中に包まって震えていた。

ケーサツが玄関のドアを破って突入してきた。

奴らが一段一段階段を上る音を聞きながら
リユーヘーはなぜこんなことになったのかを考えた。

……あの犬だ。通報したのも奴の仕業だろう。

あの犬が諸悪の根源だ。あの犬のせいで全てがおしまいだ。

そうしてリユーヘーは逮捕され、家にはだれもいなかった……。

終幕…そして…（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

リユ－ヘ－シリーズは基本BADENDなので大団円を期待して
いた方すいません。

次回作にご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2025o/>

ひきこもりユーハー ～ひきこもり対いぬ～

2010年10月20日12時52分発行